

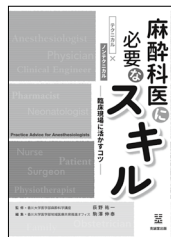


書 評

麻酔科医に必要なスキル

テクニカル×ノンテクニカル
—臨床現場に生かすコツ—

監修・荻野祐一，編集・駒澤伸泰



野球は技術と理論から成り立っている。いくら技術が優れていても、それだけでは野球はできない。投球・捕球の仕方、打撃や走力の技術とともに、それを支える理論が必要である。また、野球ルールそのものの理解と知識も欠かせない。そのうえ、選手は同僚・コーチ・監督との間に目には見えない信頼とサインの存在なくしては試合には勝てない。これは真剣勝負である。

本書はまさに技術と理論の両立の大切さを説いた素晴らしい教科書である。野球は同じ動作を繰り返し練習して、初めて熟達して自信をもてるようになるが、麻酔科技術も同様に繰り返し練習してこそ熟達に至るテクニカルスキル（技能）が得られる。しかし、野球選手はその技術をいつまでも維持できるわけではない。ピークを過ぎれば必ず年齢による体力の低下を迎える。麻酔科技術に関しても同様の経過が見られる。一方で、ノンテクニカルスキルは、経験や論文などによって得られる知識を中心とした理論的技術で、テクニカルスキルと比べると習得にそれなりの経験年数が必要であり、経験・努力によっては比較的長期間にわたってその能力を維持できるものである。

このような背景のもと、本書を拝読すると監修者・編集者の意図が明確に伝わってくる。研修医、専攻医、専門医に至るまで、幅広く応用される内

容である。実際、本書では、「第1章 今一度、麻酔科に期待されるミッションを考える」、「第2章 麻酔科術前評価からの学びを活かす」、「第3章 麻酔導入時のコツ」、「第4章 麻酔維持中のコツ」、「第5章 麻酔覚醒・術後急性期のコツ」、「第6章 『共に働く』ために必要なノンテクニカルスキル」の全6章から構成されている。章タイトルからも推察されるように、第1章、第2章、第6章はノンテクニカルスキルに分類され、その第2章と第6章の間に第3章、第4章、第5章のテクニカルスキルが挿入されている。この構成によって、見事に臨床現場に生かすコツ（ノンテクニカルスキル）に焦点を当てた本書が完成したものと確信している。

本書を読破することで、テクニカルスキルにノンテクニカルスキルを掛け合わせること（×）の意義を理解することができ、真の麻酔科医になるための道程を強力にサポートしてくれるであろう。

（JR 東京総合病院 花岡一雄）

A5 判，208 頁

2026 年 5 月，5,000 円＋税

克誠堂出版





書 評

麻酔科医が切り拓く
周術期漢方の可能性

著・出野智史



「周術期漢方」という言葉を聞いたことがあるだろうか。おそらく、多くの読者にとって耳慣れない言葉だろう。なぜなら、この言葉は本書を執筆した出野智史氏によって提唱された概念だからである。周術期とは、術前・術中・術後を含む一連の期間、すなわち手術を中心としてその前後を含めた時期を指し、時間単位、場合によっては分単位や秒単位で病態が変化する急性期医療の代表的な領域である。一方、漢方には「長期間服用することで体質を徐々に改善するもの」というイメージを抱く読者も少なくないだろう。そのため、周術期医療と漢方は一見すると結び付きにくい。しかし、本書を読むと、その先入観は大きく覆される。

第1章の冒頭、漢方は中国の医学ではなく、中国から伝わった医学をもとに日本で独自に発展した日本固有の伝統医学である、という記述にまず「そうだったのか」と思わず引き込まれ、そこから説得力のある議論が次々と展開される。西洋医学が evidence-based medicine を重視する一方で、漢方は数千年にわたる経験の蓄積によって磨かれてきた「highly experience-based medicine」であるという視点、日本の麻酔科医が周術期に漢方を活用すべき理由、麻酔科学と漢方の共通点等々……。なぜ今まで周術期に漢方が積極的に利用されていなかったのか、むしろ不思議に感じられる。

第2章では、周術期に漢方を活用する際の基本的な考え方が解説され、術後イレウス、術後悪心・嘔吐、術後せん妄、硬膜穿刺後頭痛といった西洋医学的治療が主流の病態から、食欲低下、自律神経失調症状、術後回復遅延など、西洋医学的アプローチのみでは十分な対応が難しい状態まで35に及ぶ病態が取り上げられている。それぞれに

についての、漢方医学的な病態理解と具体的な処方選択の丁寧な解説は本書の白眉だ。大建中湯をはじめ、一部の漢方薬はすでに周術期診療でも使用されているが、これほど多岐にわたる病態への応用を体系的にまとめた書籍は極めて貴重である。また、西洋医学を学んできた読者にとって特にありがたいのは、基礎研究および臨床研究のエビデンスが豊富な文献とともに提示されている点である。単なる経験論にとどまらず、科学的根拠を踏まえて漢方の有用性を理解できる構成となっている。

第2章まで読み進めると、「では実際に周術期漢方をどのように実践すればよいのか」という疑問が自然に湧いてくる。その答えは第3章、第4章で具体的に示される。さらに巻末には、推奨書籍や有用なデータベースが解説付きで紹介されており、学習をさらに深めたい読者への配慮もうれしい。特に、出野氏の施設における周術期漢方導入の実際は非常に参考になる。主治医から漢方治療について相談を受けるようになるまでの過程は、周術期漢方を実践する読者にとって大きな示唆となるだろう。

手術麻酔を専門とする麻酔科医と漢方との親和性の高さは、多くの読者にとって新たな発見となるはずである。本書は、周術期漢方という新たな領域の可能性を示すとともに、麻酔科学のさらなる発展の方向性を考える契機を与えてくれる一冊である。

(杏林大学医学部麻酔科学教室 関 博志)

A5判, 204頁
2026年5月, 4,700円+税
克誠堂出版

